九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

法学を学ぶ人々へ――本特集によせて

南野, 森
九州大学大学院法学研究院 : 准教授

https://hdl.handle.net/2324/19566

出版情報：法学セミナー. 56 (4), pp.2-3, 2011-04-01. NIPPON HYORONSHA
バージョン：
権利関係：

法学を学ぶ人々へ

本特集によせて

九州大学准教授
南野 森

法学セミナー 2011/04/no.676

いよいよ新学期である。期待に胸を膨らませ、新しい環境に飛び込む人もいれば、過ぎた一年（あるいは数年）を後悔し、新年度こそはと気を取り直して本誌を手にとった読者もいるかもしれない。その手を離してはいけない。

本特集は、これから法学を学ぼうとする人々をいちばんの読者として想定している。つまり大学１年生やロースクールの「純粋」未修者である。とはいえ、我々執筆者の主観的意図としては、本特集が永久(?)保存版になることをも目指しており、そのためには、上級生や大学院生が読んでも得るところの大きいものを書きたいし、さらには、こうして公表する以上、「入門企画」とはいえ、執筆者の同業者である研究者仲間が、いったいあいつはどんなことを書いているのかと興味をもって読むかもしれないから、プロが読んでも少なくとも時間の無駄だったと感じられることのない程度のものは書きたいとも思う。つまり、法学という学問分野をめぐって、まったくの初心者から、それを生業とする者までを一応の読者として想定するという、どだい無理な設定のもとに、各執筆者が書き上げたのが本稿に続く13本の論攷ということになる。

そして、このように法学をこれから「学ぼう」とする人のみならず、ひろく法学を「学ぶ」人々に向けて作られた本特集には、少なくとも３つ以上の売りがある。

1 上級生も楽しめる法学入門

それにしても、「法学入門」を企画することはなかなか難しい。大学１年生に「法学入門」の講義をする大学は多いだろうが、担当教員は、どのような講義をなすべきか苦悩しているはずである。「法学入門」という名の書物や特集を企画することも同様で、誰を対象にするべきかという点での苦労は上述の通りであるが、それに加えて、そもそも何を、そしてそれをどのように語るべきかについては、それこそ十人十色の考え方があるだろう。本特集では、まずは素直に王道を行くという大方針で、筆者を含めて10人の実定法科目の研究者が集い、それぞれの専攻する法学の概要や魅力、あるいは大学の講義では十分に扱う余裕がないものの学生が知っておくべきことや具体的な勉強の進め方などをわかりやすく語ることを第一の目的とした。それと同時に、読者に考えさせるような内容をも織り交ぜることで、語られたものを素直に読んでそれでお終いというのではなく、読んでみると疑問や関心を喚起され、それによってその科目を含めた法学への学習意欲を駆り立てることができるような論攷に仕上げることをも目指すことにした。上級生が読んでも面白いものになっているはずだと言うのはそれゆえである。これが、本特集の売りの１つ目である。

2 若者よ、語学を極め海外へ出でよ

本特集には、以上の10本の論攷に加えて、現在海外に滞在して研究を行っている３人の法学者に、「海外留学よもやま話」を特別に寄稿してもらった（正確にはいずれの執筆者も学生として滞在しているわけではないから、「海外留学」ではなく「在外研究」と言うべきところではある）。日本の法学者がなぜ海外留学をするのか疑問に思われるかもしれないが、これは昔から広く行われていることで、多くの日本の法学者は外国に留学した経験があり、そのうちの半分以上は英米独仏のいずれかが滞在先であろう。それはなぜか、そして海外では何をしているのか、向こうの大学はどのような雰囲気か、といったことを語るこれらの「よもやま話」を読むことで、法学（者）の世界の広さを垣間見てほしいし、将来留学を考えている読者には参考にもしてほしい。法学の勉強を一生懸命することと並び、海外を見て回

ることも、大学時代に是非とも経験しておきたいことである。そして早いうちから外国語をやっておくと、留学の楽しみも倍増するだろう。ともあれ、このように、法学者の魅力的な海外生活について語るものを３本加えているところが、本特集の売りの２つ目である。

3 法学は、読むことから始まる

本特集では、10本の個別法についての論攷の最後の部分で、各法分野についての推薦文献を簡単な解題とともに紹介することにしている。これも本特集の売りの１つであり、そこに各執筆者の個性も表れているだろう。何を選びどう紹介するかは、当然その個性に任せられているが、ただ、執筆者自身の書いたものを最低１本は含めることが企画段階での約束である。なかには謙譲の美徳で(?)自作を「宣伝」することに乗り気でない執筆者もいたが、本特集のような入門企画では、各執筆者が研究者としてどのような研究を行っているのかを窺い知ることは難しいだろうから、入門段階の読者に各分野の深さと広さを垣間見てもらうきっかけとして、全員が書くことにした。そのような専門的な論文を読んで将来研究者を志す学生が現れれば、我々執筆者にとっては思わぬ「儲けもの」ということになる。

もとより、読者が研究者を目指すかどうかに関係なく、若いうちに法学の専門論文に挑戦してみる価値は大いにある。およそ法学全般に共通することであるが、勉強の方法としては、一にも二にも読むことしかない。ところが、早い段階からチャート式や論点要約式の参考書（要するに長くて難しい文章の書かれていないもの）で勉強してしまうと、折角の潜在的な能力（脳力）を伸ばすことはできないし、将来、諸々の論述式の試験で論理的で説得力のある答案を書くことも叶わず、ましてや論文をものするなど無理である。試験や論文提出等が遠い先のことに思える段階、つまりまだ時間的・心理的に余裕のある段階で、なるべく多くの良質な著作を読んでおくことがきわめて重要である。良い文章を書くためには良い文章を読んでおくことが必要不可欠なのである。最近の大学生は、受験勉強時代の便利な参考書に近いものを法学にも求める傾向があるようにみえるが、晴れて大学生になった以上、いったんスタイルを切り替えて、重厚でつまらなそうに見える教科書や論文と格闘する覚悟を固めてほしい。脳を鍛える難問・課題と知的に対決するには大学時代がいちばんである。たまたま法学を専攻することになっただけで将来の進路をまだ決めていない読者も、法学という学問分野を「使って」、許された期間、真剣に勉強するのが良いと思う。

4 文献ガイド

最後に、法学入門全般についての文献を数冊紹介しておく。手前味噌であるが、まず南野森（編）『ブリッジブック法学入門』（信山社、2009年）がある。前半は個別法入門、後半は研究論文的なものを収めるという、一風変わった本である（手島孝教授による書評が本誌665号に掲載されている）。田中英夫『実定法学入門〔第３版〕』（東京大学出版会、1974年）、団藤重光『法学の基礎〔第２版〕』（有斐閣、2007年）などは古典的で定評がある。市川正人＝酒巻匡＝山本和彦『現代の裁判〔第５版〕』（有斐閣、2008年）、大内伸哉（編著）『働く人をとりまく法律入門』（ミネルヴァ書房、2009年）、池田真朗（編著）『判例学習のAtoZ』（有斐閣、2010年）なども特徴的で良いだろう。樋口範雄『はじめてのアメリカ法』（有斐閣、2009年）は、アメリカ法の優れた入門書であるが、法学一般についても同時に学べるさまざまな配慮に満ちた名著である。

＊　＊　＊

残念ながら、法学は、最初から面白くて仕方がないとは言えないかもしれない。90分以上続く大学の講義も単調でつまらない可能性があるし、眠くもなるだろう。つまり、期待に胸を膨らませて入った途端、失望するかもしれない。しかし、それが大学なのである。元来は退屈なもの、訳がわからないものだと思って良い。しかし、本特集の執筆者13人のように、研究が好きで研究者になる人間が世の中にはたくさんいるということは、きっと法学には何かの魅力があるはずである、という理屈はわかるだろう。そして、法学の魅力を知るためには、法学としばらく真剣に付き合ってみなければならない。しばらく、というのは不確定であるが、せめて半年や１年くらいは、講義もサボらず、薦められるままにさまざまな著作を読んでみてはどうだろうか（とはいえ、本特集の一部の執筆者は大学入学後１～２年のあいだ、不真面目学生であったようなので、上級生になってから心を入れ替えるという手もなくはない）。

（みなみの・しげる）